

日本画における銀箔の変色技法：変色方法の違いが表現に及ぼす影響について

著者	當銘 弓佳
発行年	2018
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2018
報告番号	12102甲第8764号
URL	http://hdl.handle.net/2241/00153955

氏名	當銘 弓佳		
学位の種類	博士（芸術学）		
学位記番号	博甲第	8764	号
学位授与年月	平成	30年	4月 30日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	日本画における銀箔の変色技法—変色方法の違いが表現に及ぼす影響について—		
主査	筑波大学教授	博士（芸術学）	守屋 正彦
副査	筑波大学教授	博士（芸術学）	仏山 輝美
副査	筑波大学教授	博士（芸術学）	太田 圭
副査	長崎大学准教授	博士（芸術学）	牧野 一穂

論文の内容の要旨

當銘氏の博士学位論文は、日本画における銀箔の変色方法の違いが表現に及ぼす影響について、資料調査と実験制作にもとづいた論考を記したものである。その要旨は以下のとおりである。

序章では、本研究の題目を設定するまでの背景、研究目的と意義、研究の範囲、構成などを述べている。主題の前提となっている問題点は、銀箔が多々ある金属箔のなかでは最も変色しやすいという特徴を持ち、その点を「欠点」として捉えられることが多いことである。著者はその点を指摘した上で、銀箔の変色によって現われる「色」を日本画制作で主に用いられる岩絵具と同様に、「一つの色」として積極的に活用することで、新しい表現が展開するのではないかと考えている。さらに、銀箔をはじめとして様々な種類の金属箔や泥などの金属材料を制作に取り入れている理由を、「金属は色材として色を得ることができるだけでなく、物質的にも多くの象徴性を秘めていると考えられる」と述べている。そして変色させた銀箔を絵具と同様に用いることによって、「筆者独自の生命観の表現を成立させることができるのではないか」と表現の可能性を探求している。

第一章では、日本画における銀箔の特徴について、使用の歴史をたどりつつ、金箔、プラチナ箔、アルミ箔、錫箔などの金属箔と比較考察している。第一節では日本の美術史における銀箔の使用について、近代以前と以後に分け、前者では高松塚古墳壁画に描かれた「太陽」への金箔の使用と、「月」への銀箔の使用をはじめとして、平安時代の絵巻物、桃山時代の障壁画、江戸時代の屏風絵や襖絵等の作例について言及している。後者では、西洋絵画の流入による影響のみならず、絵画制作のための様々な素材開発の影響にも考察対象を広げるなど、多視点からの考察を試みている。第二節では、銀箔について考察を深めるため、石川県金沢市にある銀箔の製造工場を訪れ現地調査を行っている。その結果、著者は、銀箔の「欠点」とされている「変色すること」を、むしろ日本画の表現においては好ましい「利点」として捉えているのであるが、本章ではそのように捉えていることの論拠を示している。

次に第二章では、日本画制作における具体的な銀箔の変色方法について調査を行っている。第一節では、銀箔に関する資料調査による銀箔に対する基本情報に基づき、銀箔が変色する原因は主に「硫黄」であることを示し、狩野派伝来の変色方法や現代の変色方法などの数種類の変色方法について例示して

いる。第二節では、前節で例示した材料と変色方法について、実際にテストピースを作成して実証し、変色方法の違いによって出現した変色後の銀箔の色の違いについて考察をしている。

続く第三章では、銀箔の変色を活かした日本画作品の考察を行っている。第一節では、銀箔の変色が意図的に行われ始めたのが江戸時代ではないかという著者の推論に基づき、尾形光琳の《紅白梅図屏風》と鈴木其一の《芒野図屏風》について考察している。前者では画面中央部に描かれた「流水紋」の変色について、先行研究を参照しながら詳細な考察を行っており、後者では同画題による2作品に用いられている銀箔の色の違いの原因を推定している。第二節では近現代の日本画作品から、銀箔の変色を積極的に作品に取り入れた加山又造によって制作された作品《春秋波濤》と《華扇屏風》において、任意に変色させた銀箔の色がもたらす効果について、江戸時代の作品等と比較しながら考察している。

さらに第四章では、著者の制作における銀箔の変色に関わる実践と分析を行っている。第一節では、第二章で実証した変色方法を用いて変色させた銀箔を、著者の作品に取り入れたことによる表現上の効果について結果をまとめている。第二節では、銀箔の変色を活かした作品の実例における、変色方法によって現れた色の違いに着目し、それらの色の違いが表現にもたらす影響について論考している。

終章では、研究の概括として、以上の銀箔の変色技法に関わる考察と実証実験および制作実践から導き出された本論文の結論を示した上で、今後の研究課題と制作への展望についてまとめている。そして銀箔の変色の積極的な活用方法のなかに、著者の今後の日本画制作に対して有効な結論と課題を見出すことができたと結んでいる。

審査の結果の要旨

(批評)

本論文は、日本画制作者である著者が、具体的な銀箔の変色方法に基づき、「表出する色の違い」と「色の違いによって表現にもたらされる効果」について、数多くの資料による丁寧な考察と詳細な分析、先行研究等の資料調査、実証実験、制作実践をとおして結論を求めたものである。

まず、何よりも特筆すべき成果として評価する点は、様々な条件によって影響され、いわば偶然性をもって出現する銀箔の変色した色味について、著者は、ほぼ自在にコントロールできる技術を獲得したことである。

著者は、本論文を執筆する前から銀箔の変色技法について興味を抱き、自身の日本画作品に採り入れていたが、本研究において多くの実証実験を行い変色の具合を調整できるようになった。この結果、銀箔の変色方法を、理論的、合理的に捉え直したことで確実性が増し、汎用性の高い非常に説得力がある研究となった。また、本論文にまとめられた、古代から現在までの日本絵画史における銀箔の使用と変色技法に関する資料調査と詳細な分析は、これまでにない貴重なデータにもなったと評価できるものである。

このように著者は、資料調査や技法実験を行うことで銀箔の変色のメカニズムを明らかにし、これまで偶然性に委ねることの多かった硫黄成分によって変色される銀箔の色の予見の精度も高めることができた。この研究結果は著者自身はもとより、現代において日本画を描いている者に対しても、銀箔の変色を自在にコントロールする技法の提供にも繋がると思われ、今後の日本画制作における変色技法の展開の可能性を示したという点でも評価できる。

以上の通り本研究は、日本画制作者でもある著者の、とかく感覚的になりがちな、また偶然性に頼りがちな銀箔の変色方法を、資料に基づく調査・分析と実験制作に基づく考察・分析という客観的な裏付けの得られる研究方法によって昇華させたもので、日本画作品を制作する感性豊かな著者ならではの説得力を持った博士論文になったと高く評価できる。

平成30年3月8日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士(芸術学)の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。